

# 新井達矢 「日本の仮面展」

平成28年  
1月9日(土)~17日(日)  
10:00~17:00  
入場無料

羽村市生涯学習センターゆとろぎ展示室

舞楽面・能面・狂言面・神楽面・創作面など約30点を展示

最終日は特別公演「雅楽と能楽の贅沢なひと時」で  
出展作品のうち舞楽面1面と能面3面が使用のため不在となります。

お問い合わせ / 042-570-0707 羽村市生涯学習センターゆとろぎ 〒205-0003 東京都羽村市緑ヶ丘 1-11-5

主催 / 羽村市・羽村市教育委員会

# 新井達矢「日本の仮面展」

抑制した情熱を秘め、ひたすらに、ただひたすらに面を打つ  
現代の面打師・新井達矢の手で魂を宿した一面一面が静かに語りかけてきます。



撮影 / 山口宏子

ひたすらに、ただひたすらに

6歳の頃から能面に興味を持ち、面打師で無形文化財保持者、長澤氏春氏に師事し、22歳の時(東京造形大学在学中)「新作能面公募展」において文部科学大臣奨励賞を史上最年少で受賞。卒業後も市内工房で制作に打ち込み、最近作は舞楽面「蘭陵王」を完成。開館10周年特別公演「雅楽と能楽の贅沢なひと時」では、「日本の仮面展」出展作品を用いての公演となります。

## 〈プロフィール〉

- 昭和57年 11月9日生れ
- 63年 長澤氏春氏と出会う
- 平成 元年 神楽面・狂言面を彫り始める
- 11年 三多摩美術展において「東京都市長会会長賞」
- 15年 東京造形大学造形学部美術学科彫刻専攻に入学
- 17年 国民文化祭ふくい2005「新作能面公募展」において「文部科学大臣奨励賞」受賞
- 18年 映画「面打 / men-uchi (三宅流監督)」上映
- 19年 東京造形大学造形学部美術学科彫刻専攻を卒業
- 20年 現代能・狂言面作家展(早稲田大学演劇博物館) 仏像、絵画、能面、神楽面、八人展(とげめぎ地藏高岩寺)以降、毎年開催
- 21年 金春宗家蔵の伝聖徳太子作白式尉を写し、金春宗家蔵となる
- 22年 「能面を打つ」新井達矢 / 山口宏子写真展(フレームマンエキシビジョンサロン銀座 アンビションII)
- 23年 「十二音会」の依頼で舞楽面を制作
- 26年 三越展示会及び講演
- 26年 能面科研の協力・調査と研究(浅見龍介先生と共に継続)
- 26年 熊本県芸術文化祭「能楽講座」能面を語る 講師

## 〈ドキュメンタリー上映〉

テレビはむら提供 「面打 新井達矢」

平成25年度東京都広報コンクール 映像部門最優秀賞  
平成26年度全国広報コンクール 映像部門入選

会期中、会場では新井さんの面の制作工程をはじめ、面への想いをインタビューした映像がご覧いただけます。



## 〈ギャラリートーク〉

新井達矢 × 葛西聖司

1月17日(日)13:00~13:50

ゆとりぎ小ホール

当日12:30会場受付・先着250名(入場無料)



葛西聖司  
アナウンサー  
古典芸能解説者

ゲストの葛西聖司さんは、NHKエグゼクティブアナウンサーとしてテレビ、ラジオのさまざまな番組を担当。現在はその経験を生かし、歌舞伎など古典芸能の解説や講演、また日本伝統文化の講義などで大学の教壇にも立ち、朗読教室や執筆活動も続けています。

## 〈同時開催〉

「日本の仮面展」出展作品を舞台上で鑑賞できる特別公演  
雅楽と能楽の贅沢なひと時

平成28年1月17日(日)

14:00開場 14:30開演

ゆとりぎ大ホール

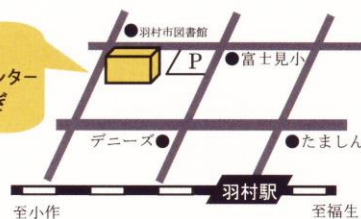
全席指定 大人 2,000円 高校生以下 500円

チケット絶賛販売中

## 〈アクセス〉



羽村市  
生涯学習センター  
ゆとりぎ



JR 青梅線羽村駅  
東口下車徒歩8分

- JR 東京駅から青梅特快で1時間3分、快速で1時間13分。JR 立川駅から20分
- 圏央道青梅IC および日の出IC からおよそ15分

ARAI TATSUYA JAPAN MASK EXHIBITION



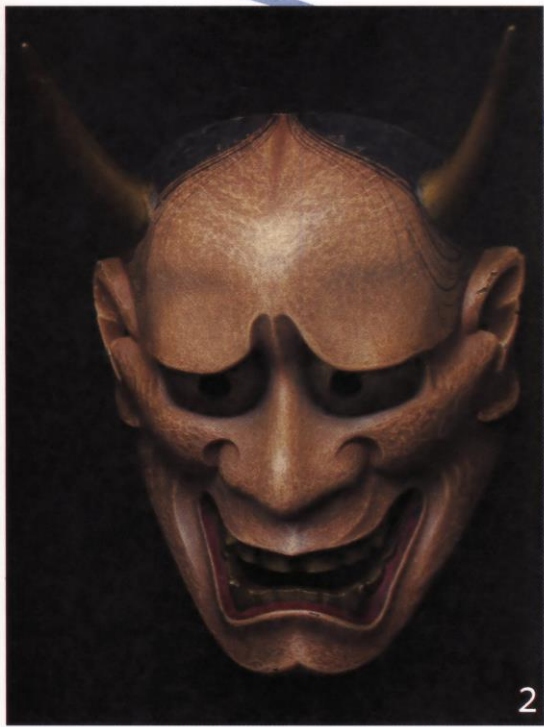
# 新井達矢 「日本の仮面展」

平成28年1月9日～17日 羽村市生涯学習センターゆとろぎ 展示室



YU・TO・RO・GI

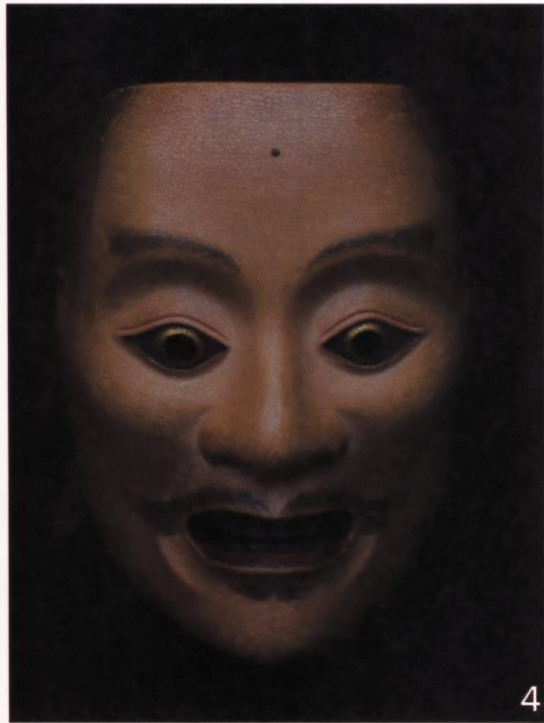
# 「日本の仮面展」から



2



1



4



3



5

**1 能面「増女」** 天女や高貴な女性に用いられ、特に憂いを含んだ品位を大切にする若い女性の面。細くキリッとした目と通った鼻筋。口角が上がらない厚い下唇を持つ口が特徴です。

**2 能面「般若」** 女性の悲しみや怒り、嫉妬を表現した怨霊面ですが、化け物ではなく品位と人間味を感じさせるのが大切と云われます。

**3 狂言面「姫猿」** 能の「嵐山」のアイ狂言「猿婿」に用いられる花嫁の猿。古面の写真を基本に自分なりの可愛らしさを出してみました。

**4 能面「三日月」** 本来は男神の面として創作されましたが、現在では武将の怨霊として使われることが多く、目の金具はこの世の者でないことを表しています。

**5 創作面「赤鬼青鬼」** 神楽面や狂言面を基本に自分なりの面白さを追求。デッサンを描き対比を考えながら楽しんで作りました。地元宗禅寺さんの節分でご使って頂いております。

# 舞楽面 「蘭陵王」 制作過程



## 〈蘭陵王〉完成面

心身を削って数年掛かり、苦心の末に完成した蘭陵王面（宮内庁式部職楽部所蔵面の一部復元創作を含む写し）髭と眉は馬の尻尾、別材の目と顎は手組みの組紐で繋ぐ。本体の眼球と歯は純銀板を叩き出して被せ、竜の牙は純銀棒を曲げて削り出すなどの方法で成形し埋め込んでいます。



## 〈蘭陵王〉完成面・面裏

舞人の顔が入る部分は麻布を貼りこんでから漆を塗り重ねたもの。竜の翼の裏や胴の内部は纒縹彩色を施しています。この彩色法は東洋で古くから用いられてきた技法で、色の濃淡や明暗を並列することで立体感を表すもの。白土で全面を下地の後、天然岩絵具や水銀朱、金泥などを用いながら細部まで慎重に描きます。舞台上使われたら殆ど見えるものではないようですが、本面は驚くほど凝っています。



1 蘭陵王面の中彫り、本体と別材で制作した頭上竜に感じが出始めたところ。



2 頭上龍の細部を作るための「割矧ぎ」は、一旦割り放すことで細部を彫刻しやすくさせるのが主な目的。口蓋部から彫り込むことで頭部を空洞にし目を削り抜く。更に裏から眼球を表す水晶製レンズ型の玉眼を嵌め込み瞳を裏から描いています。また、舞に律動して動く竜の舌も内部から仕込んでいます。「割矧ぎ」や水晶の目を仕込む「玉眼」の技法は仏像彫刻から生まれました。

3 国産の黒漆を数回塗り重ねた段階。これまでに木地に直接生漆を塗り込む「木地固め」、砥粉と生漆を混ぜた錆漆の塗り研ぎを繰り返す「錆下地」写真のような黒漆の塗り研ぎを繰り返す「呂色研ぎ」を経ています。これらの工程は表面の金箔を美しく発色させるために欠かせません。



4 純度の高い金箔を貼り終え、頭髪と竜の髪に下地として白土を塗ったところ。

5 頭髪に天然群青、竜の髪に朱土と墨の混色を塗り重ねたところ。



6 彩色と古色。竜の胴体全面に朱で鱗の輪郭線を描き、天然緑青と天然藍で一枚一枚に変化を付ける。翼も天然緑青と朱で彩り、竜の顔面も表情を引き出すため適宜彩色し毛筋には金泥で線描きを施す。そして最終的な古色、王朝文化に相応しい華やかさを残しつつ落ち着きを与えました。



撮影 / 山口宏子

## 「日本の仮面展」によせて

この度羽村市と羽村市教育委員会の主催伝統文化交流事業の一環として個展を開催させて頂くことになりました。長澤氏春先生との出会いをご縁に、小学生の頃から遊びの延長として始め、凡そ27年になります。思い返せば興味の発端は豊かな表情そのものであり、難解な造形を追い求めるだけで精一杯でした。しかし師を失った20歳頃からは、舞台上でこそ本来の美しさを発揮し、芸能の中で生きる存在として捉えようとの意識が強くなりました。昔から伝えられた型を守る「写シ」が面打ちの根幹であると考え、それは最も好きな仕事になっています。修復などを通じて古面の素晴らしさを直に感じ、自らの制作に生かしていくことが日々の目標です。とは思いつつ、感性を絞り出す「創作」も魅力的で、ときどき手掛けたくなるのは不思議なことで何故かわかりません。そして、仏像はじめ人物や動物の木彫作品など、作りたいモノは限りなく、欲ばかりが先走ります。打つ度に新たな疑問が浮かび、その解明を唯々目指しているような未熟な面ばかりだと自覚していますので、ある経過発表としてご高覧頂けたら幸いです。

## 〈プロフィール〉

- 昭和57年 11月9日生れ  
63年 長澤氏春氏と出会う  
平成 元年 神楽面・狂言面を彫り始める  
11年 三多摩美術展において「東京都市長会会長賞」  
15年 東京造形大学造形学部美術学科彫刻専攻に入学  
17年 国民文化祭ふくい2005「新作能面公募展」において「文部科学大臣奨励賞」受賞  
18年 映画「面打 / men-uchi (三宅流監督)」上映  
19年 東京造形大学造形学部美術学科彫刻専攻を卒業  
20年 現代能・狂言面作家展(早稲田大学演劇博物館)  
仏像、絵画、能面、神楽面、八人展(とげめき地藏高岩寺)以降、毎年開催  
21年 金春宗家蔵の伝聖徳太子作白式尉を写し、金春宗家蔵となる  
22年 「能面を打つ」新井達矢 / 山口宏子写真展(フレームマンエキシビジョンサロン銀座 アンビションII)  
23年 「十二音会」の依頼で舞楽面を制作  
25年 東京国立博物館の特別陳列「日本の仮面 能面 是関と河内」関連イベント「面打」にて実演と講演  
26年 三越展示会及び講演  
同年 能面科研の協力・調査と研究(浅見龍介先生と共に継続)  
同年 熊本県芸術文化祭「能楽講座」能面を語る 講師

### 表紙の仮面・右から

**舞楽面「綾切」** 藤原末期の仏像のような穏やかで気品のある表情に魅かれ大阪、住吉大社所蔵の綾切の写真を参考に打ちました。本来は四面一組で四人舞に使われます。

**狂言面「毘沙門」** 七福神でお馴染みの毘沙門天の面ですが、武神としての精悍さよりも、どっしりとして豊かな肉付と結んだ口が狂言らしい滑稽さを感じさせます。

**能面「増髪」** 女神や神が憑依した神秘的な女性の役に用いられます。眉間や頬の筋肉の引きつりと、激しく乱れた髪など個性的な造形を持っています。

**狂言面「乙御前」** 三平二満(さんぺいじまん)といわれ、平らな顔で醜女の面とされますが、親しみやすさの中に、若くて愛らしい雰囲気強調してみました。

### 新井達矢「日本の仮面展」

会期：平成28年1月9日～17日

会場：羽村市生涯学習センターゆとろぎ 展示室

主催：羽村市・羽村市教育委員会

事業協力：十二音会・中所宜夫能の会・ゆとろぎ協働事業運営市民の会・mayugura design